

第 23 回いしかわの発掘展

いしかわの

城下と村

ガイドブック



大聖寺城下（八間道遺跡）



七尾城下（七尾城跡シッケ地区遺跡）



金沢城下
金沢城下町遺跡（前田氏（長種系）屋敷跡地区）



小松城下（大川遺跡）

石川県埋蔵文化財センター

[問合わせ先] 〒920-1336 金沢市中戸町 18-1
電話 076-229-4477

[主 催] 石川県教育委員会
公益財団法人石川県埋蔵文化財センター



※新型コロナウイルス感染拡大緊急事態のため、開催期間が変更になりました。詳しくはホームページをご確認ください。

ごあいさつ

地中に埋もれている遺跡^{いせき}とちがって、お城や城^{じょう}下^かはその名残^{なごり}を実際に見ることができます。そうした意味では、お城や城下は身近にある遺跡の代表かもしれません。

石川県には戦国^{せんごく}～江戸時代の城下^{なごり}の名残が、土地^{くかく}の区画や道路、建物、用水路^{ようすいろ}などに色濃くみられ、近年には観光地として、さらには歴史学習の場としても大いに注目されています。

今回の「いしかわの発掘展」では、七尾・金沢・小松・大聖寺の4つの城下^{きんりん}と近隣の村を取り上げ、発掘調査からわかった成果^{せいか}をもとに、それぞれのテーマに沿って歴史を紹介します。

また、ご紹介した以外にも、たくさんの魅力^{みりよく}や見所が城下にはあります。これを機会^{きかい}に、興味^{きょうみ}を持った城下や村をこの「ガイドブック」を手に訪ねてみてください。

そして、地面の下で眠る遺跡^{みぢか}が意外と身近にあることを感じてみてください。新しい発見があるかもしれません。

一六世紀

七尾城下の職人たち

戦乱で荒廃した京都を離れ、能登に下った守護・畠山氏は居城七尾城とその城下を舞台に、都の文化を積極的に移入した生活を営んだと言われます。戦国大名としての評価とは裏腹に、畠山氏のもとで育まれた文化力には目をみはるものがあります。

ここでは発掘調査によってわかってきた、「能登畠山文化」を支えた職人たちの仕事ぶりを中心にご紹介します。



七尾城下の成り立ち

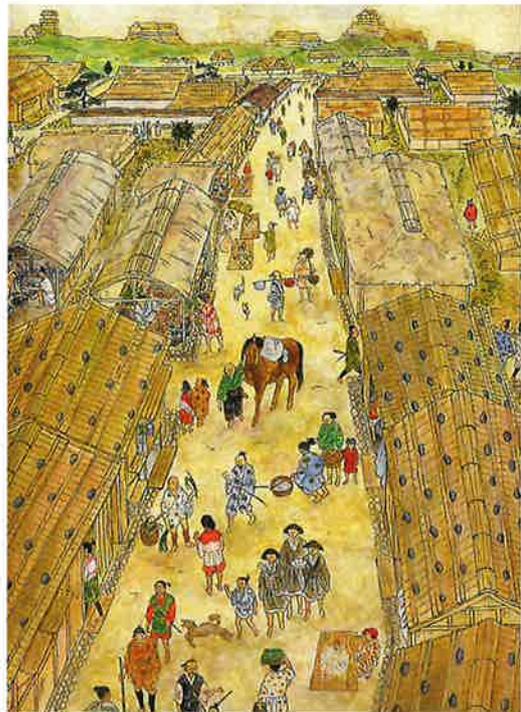
七尾城は日本 100 名城にも名が挙がるほど、著名なお城です。守護・畠山氏しゅご はたけやまにより 16 世紀初頭ちくぞうに築造されたと考えられています。

城下町は 16 世紀初頭～ 16 世紀後半（第 1 期）と 16 世紀後半～末（第 2 期）の大きく二時期に分けて形成されたことが発掘調査により明らかになりました。

城下町建設の特徴は、第 1 期は正方形区画そうがまえ こうちくを町割りの基本とし、第 2 期は総構けいせいが構築され、「内」と「外」の差別化が図られたことが挙げられます。

工房こうぼうと隣接した屋敷群の存在（シッケ地区）が城下町として知られ、当時は多くの人たちで賑わっていた様子が遺跡から見て取ることができます。

戦乱で荒廃した京都を離れ、能登に下った守護・畠山氏は居城七尾城とその城下を舞台に都の文化を積極的に移入した生活を営んだと言われます。



画：畠山尚子「千門万户の城下町」



七尾城下と総構全景（西上空から）

画像 2 点とも七尾市教育委員会提供

七尾城を めぐる人々

七尾城の主は古い順に、畠山氏、上杉氏、織田氏、前田氏と代わって行きました。平和的に交代が行われたのは織田氏→前田氏の時だけで、他は戦の結果としての城主交代でした。期間的には畠山氏の時代が長いのですが、畠山氏は能登国の守護として土着化したもので、七尾にあっては温井・遊佐・長などといった在地土豪衆による盛り立てが欠かせませんでした。本丸に至る大手道沿いの平坦地のうちにはこうした在地有力族の屋敷地が含まれているものと考えられています。

長期に及んだ攻城戦の末の上杉謙信の七尾入城（1577年）は謙信にとってもうれしい事であつたらしく、本丸へ乗り込んだ際の景色を家臣に伝えた手紙文（「絵像に写し難き景勝」云々）には、難攻不落の名城を手に入れた喜びが滲んでいるといわれます。

七尾城は織田氏以降の短い期間に再整備されたことも考えられており、小丸山城の造営や城下移転の実情には考えるべき課題が多いと言われます。前田氏の本拠地は程なく金沢へ移りますから、七尾城廃城の頃は人々の流動性が著しく高まった時代でした。



城山展望台から七尾湾を望むが、曇りで残念！



小丸山城公園の入口

等伯と七尾城下

長谷川等伯は畠山重臣奥村家の子。1539年生後間もなく七尾城下の染物業・長谷川家に養子に出され、25歳までに七尾城下で絵師・彩色職人として大成。畠山家滅亡前に上洛し、中央画壇に長谷川派の地歩を築く。晩年の1610年には江戸の徳川家康に招かれたが、到着後間もなく死亡しました。

等伯の技と画才は七尾城下のみを舞台として培われたとされますが、この点に「能登畠山文化」の高度さが窺われます。

展示中の越前焼甕は染色に用いられたことが考えられています。ひょっとすると若き日の等伯が作業に使ったものかもしれませんね。

探索マップ



国土地理院「地理院地図」をもとに作成
(<https://maps.gsi.go.jp/development/ichiran.html>)



1

七尾城本丸跡



場 七尾市古府町

標高 350mのところであり、途中まで車で行くことができるので、疲れもなく登ることができます。石垣や大手道など当時の姿が残っている箇所もあって上からの眺めもきれいです。国指定史跡。

2

城山展望台



場 七尾市古城町

能登の山々や七尾湾を一望できる、絶景スポットです。七尾城に行く際には是非一緒に行っていただきたい所です！！虫除けスプレーをお忘れなく！

3

七尾城史資料館



場 七尾市古屋敷町

開 午前9時～午後5時
(入館は4時半まで)

金 一般 200円

七尾城の麓にある資料館です。本資料館では今回の展示は見ることでできなかった遺物が多数展示されています。七尾城に行ったときは是非お立ち寄りください。

4

かいこかん
懐古館

場 七尾市古屋敷町

開 午前9時～午後5時
(入館は4時半まで)

金 一般 200円

七尾城史資料館同敷地内に所在する幕末時代加賀藩の肝煎を務めた飯田家の旧宅です。中にはその時代の古美術品が展示されています。国登録有形文化財。

詳しい利用案内等は各施設ホームページ等でご確認ください。

能登畠山氏・七尾城跡略年表

年号	(西暦)	主な出来事	領主	拠点	
延元 3年	(1338)	足利尊氏が征夷大將軍となり、室町幕府が成立する	畠山	府中 守代	
明德 2年	(1391)	畠山基国、河内・越中とともに、能登守護となる。			基国(もとくに)
応永13年	(1406)	畠山基国が没し、次男満慶が家督を継ぐ。			満慶
応永15年	(1408)	畠山満慶、畠山家の家督を兄の満家に譲り、満家から能登守護を与えられる。能登畠山家(畠山匠作家)を創設する。	能登畠山	府中 守護館	
永享 4年	(1432)	畠山満慶没し、長男義忠が家督を継ぐ。			初代満慶(みつのり)
享徳 4年	(1455)	この頃、畠山義統が守護となる。祖父の義忠が隠居する。			二代義忠(よしただ)
応仁元年	(1467)	畠山義統、西軍方で応仁の乱に参戦する。			三代義統(よしむね)
文明10年	(1478)	応仁の乱が終わり、この頃、畠山義統、能登に下向する。			
文明15年	(1483)	畠山義統、府中守護館で連歌会を催し、「賦何船連歌」が詠まれる。			
延徳 2年	(1490)	畠山義元、能登に下向する。			四代義元(よしもと)
明応 6年	(1497)	畠山義統没し、長男義元が家督を継ぐ。			五代慶致(のりむね)
明応 9年	(1500)	守護代の遊佐統秀ら、義統の次男慶致を守護に擁立する。義元は越後へ逃れる。(明応の政変)			
文亀 3年	(1503)	畠山慶致、父義統の七回忌法要を瑞応山大聖寺で行う。			六代義元(よしもと)
永正 5年	(1508)	畠山義元、越後から戻り、再び能登守護となる。			七代義総(よしふさ)
永正12年	(1515)	畠山義元没し、慶致の長男義総、能登守護となる。			
大永 3年	(1523)	七尾の招月庵で「賦何路連歌」が詠まれる。			
大永 5年	(1525)	七尾城内の義総邸で「賦何人連歌」が詠まれる。			
大永 6年	(1526)	畠山義総、七尾城内で歌会を催し、冷泉為広・為和父子、列席するが、同年冷泉為広 七尾で没する。			
天文 8年	(1539)	絵師の長谷川等伯(信春)、七尾に生まれる。			
天文13年	(1544)	禅僧の影叔守仙が「独楽亭記」に七尾城と城下の様子を記す。			
天文14年	(1545)	畠山義総没し、次男義綱が家督を継ぐ。	八代義綱(よしつぐ)		
天文16年	(1547)	畠山駿河(義総の弟)ら、能登に侵入し、重臣の温井総貞らによって鎮圧される。			
天文19年	(1550)	この頃、能登の内乱(遊佐統光と温井総貞の対立)によって七尾城下が焼失する。			
天文20年	(1551)	この頃、重臣七名からなる「畠山七人衆」が領国支配の実権を握る。 この頃、畠山義統の長男義綱が守護となる。隠居した義統は遺祐と号し、義綱の後見人となる。	九代義綱(よしつな)	七尾城 (山城と城下)	
弘治元年	(1555)	畠山義統・義綱父子らが、温井紹春を謀殺し、大名権力の回復をはかる。 温井一党が一向一揆などの支援を得て、七尾城方と対峙する。(弘治の内乱)			
永禄 9年	(1566)	重臣らが畠山義綱を追放し、長男義慶を守護に擁立する。	十代義慶(よしのり)		
永禄11年	(1568)	畠山義綱、七尾城に攻め込み、包囲する。			
天正 2年	(1574)	畠山義慶、重臣に毒殺され、弟義隆が家督を継ぐ。	十一代義隆(よしたか)		
天正 4年	(1576)	越後の上杉謙信、能登へ攻め入り、七尾城を囲む。			
天正 5年	(1577)	遊佐・三宅・温井氏らが上杉方に内応し、閉城に反対する長氏一族を謀殺する。 七尾城が陥城し、能登畠山氏が滅亡する。 上杉方の嫁坂長実が七尾城代となる。	上杉		謙信(けんしん)
天正 6年	(1578)	上杉謙信、急死する。(48歳)			景勝(かげかつ)
天正 7年	(1579)	温井景隆ら嫁坂長実を追放し、七尾城を奪い返す。			
天正 9年	(1581)	織田信長、菅屋長頼を七尾城代とし、温井景隆・三宅長盛が石動山へ退き、その後越後へ行く。	織田		菅屋長頼 すがやながより
天正10年	(1582)	前田利家、福田信長より能登一国を与えられる。 織田信長、菅屋長頼に能登・越中の城割りを命じ、安土へ戻らせる。 本能寺の変で織田信長が自害する。(49歳) 温井景隆・三宅長盛ら、越後勢とともに石動山に入るが、前田利家・佐久間盛政らによって滅ぼされる。 利家、石動山を焼き討ちする。(石動山・荒山の合戦)	前田	利家(としいえ)	
天正11年	(1583)	前田利家、豊臣秀吉より、石川、河北二郡を与えられ金沢(尾山)へ移る。 前田安勝(利家の兄)が、七尾城代となる。		城代安勝(やすかつ)	
天正12年	(1584)	前田利家、加越国境などで越中の佐々成政と戦う。 佐々成政勢が七尾城を包囲する。			
天正13年	(1585)	佐々成政、羽柴秀吉に降伏する。 この頃から、前田利家が所口の小丸山に築城を開始する。			
天正17年	(1589)	愛宕山の気多本宮や小島・所口の百姓屋敷を明神野に移す。			
文禄 2年	(1593)	前田利家の次男利政、豊臣秀吉より能登一国を与えられる。		利政(としまさ)	
文禄 3年	(1594)	前田安勝没する。長男利好が七尾城代となる。		城代利好(としよし)	
文禄 4年	(1595)	所口の惣構え堀の開削を進める。			
慶長 4年	(1599)	前田利家、大坂で没する。(63歳)			
慶長 5年	(1600)	関ヶ原の戦い。 前田利政が改易され、利政領は加賀藩領となる。		利長(としなが)	
慶長 8年	(1603)	徳川家康、江戸幕府を開く。			
慶長15年	(1610)	前田利好没する。利家三男知好が七尾城代となる。 長谷川等伯、江戸で没する。(72歳)	城代知好(ともよし)	(平小丸山) 城山城	
元和元年	(1615)	「一国一城令」が出される。			
元和 2年	(1616)	七尾城代前田知好(利家三男)、京へ上り七尾(小丸山)城廃城。			

金沢城下の

都市文化と人々のくらし

江戸時代後半には江戸・大阪・京都に次ぎ、日本第4位の人口を誇る都市であった金沢。

当時の絵図と現在の地図を比べ、一致している部分も多々みられる。四〇〇年前の江戸時代前半にひらかれた「陣の惣構」に囲まれていた町割や道路、用水路が現在における都市構造の元になっていることがわかります。

金沢城下の成り立ち

江戸時代初期の金沢城下を描いた地図には、「寛文七年金沢図」(1667)や「延宝金沢図」(1674)などが知られています。おおよそ7年の間に城下の範囲が拡大したことや、宅地の細分化が進んだことなど、短期的な変化を知ることができる絵図です。これらの絵図にも描かれるように、金沢城下は、防御力を高めるために築かれた慶長4(1599)年の内惣構けいちょうと慶長15(1610)年の外惣構そうがまえにより、東と西を二重の惣構(堀と土居)で囲まれています。

惣構の内側に上級武士や中級武士とその家来の屋敷地、北国街道や石引道などの街道沿いに商人や職人などの町屋があり、惣構の外側の放射線状にのびた街路沿いに、短冊状の細かな屋敷地を持つ下級武士の足軽組地・与力地・地子地・百姓地などの居住地があり、金沢城を中心として同心円状に配置されています。また、卯辰山うたつやまや小立野こだつの・寺町の各台地上に寺社地が配置され、身分別・職業別の居住形態なども詳しい記録が残っています。

金沢城下には、寛永8(1631)年と12(1635)年に起きた大火を契機に、町人地が惣構外側の街道沿いに移転し、防火の機能を高めるために寛永9(1632)年、犀川上流から金沢城内へ辰巳用水たつみ ようすいが引かれています。

また、金沢の武家人口は利常としつねの寛永16(1639)年の小松城隠居いんきょにより、一時的に減りますが、万治元(1658)年の利常死後、金沢へ戻った藩士や商人などにより金沢の城下町人口は再び増加します。加賀藩102万石の金沢城下町の範囲も拡大し、寛文期(1661～73)には百姓地の町場化が一段落しています。

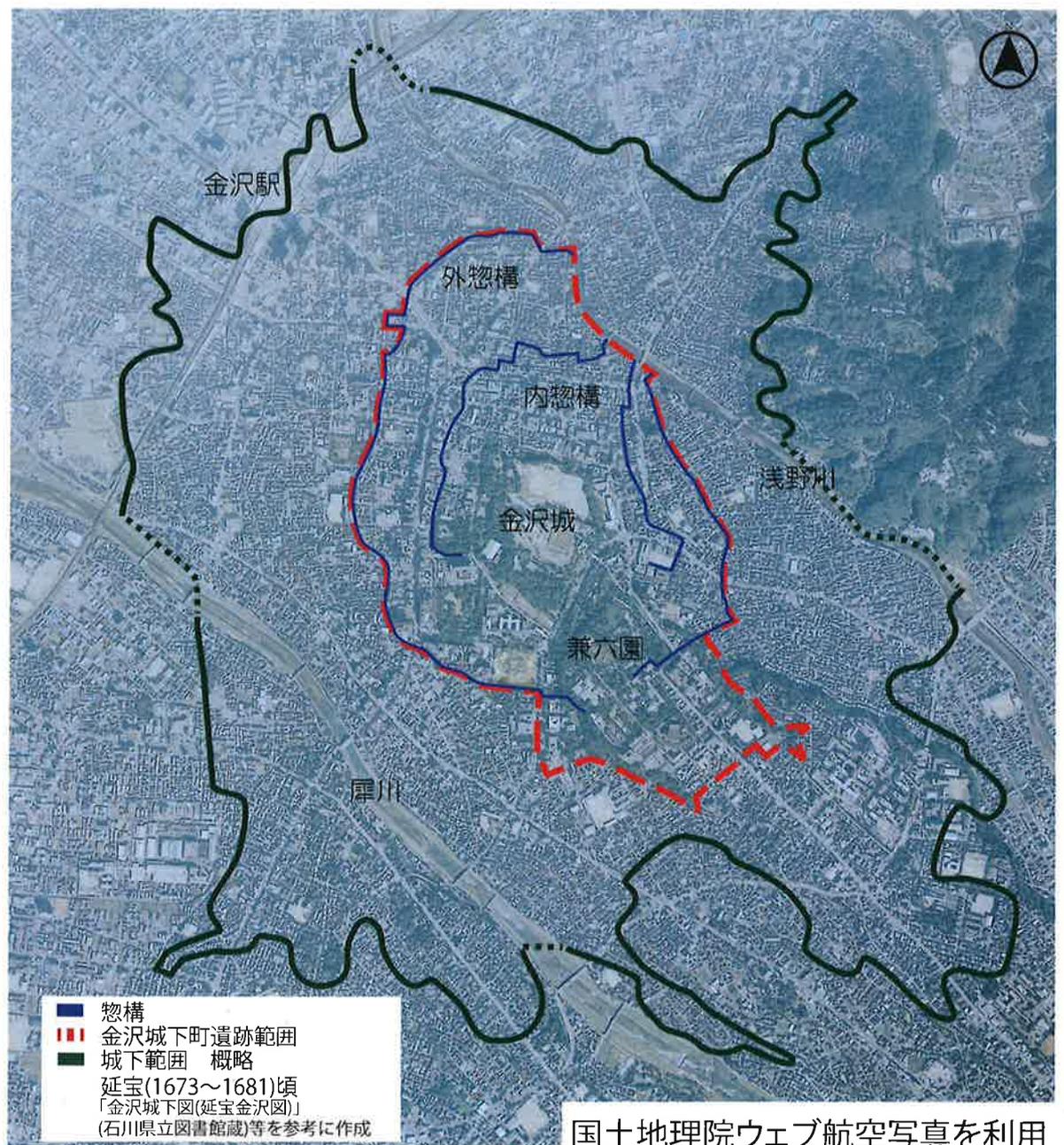


『寛文七年金沢図』(石川県立図書館蔵 部分)

『延宝金沢図』(石川県立図書館蔵 部分)

金沢城下では、江戸時代の中に1千軒以上が焼失した大火が約10回起きたことが記録されていますが、その中でも最大の火災は宝暦9(1759)年に起きた大火です。金沢城本丸・二の丸・三の丸や櫓^{やぐら}などが焼失し、金沢城下の大部分でも1万軒以上の武家地や町地が焼失しています。

また、寛政11(1799)年の大地震では、約4千軒の家屋と土蔵約1千軒、金沢城の石垣28箇所が崩れるなどの被害を受けましたが、道筋や町割りなどは、江戸時代終わりまで大きく変更されることはありませんでした。



辰巳用水（国史跡）

辰巳用水は、金沢城の水利改善を主な目的として加賀藩が造営しました。寛永9(1632)年にわずか一年足らずで完成したと言われています。この用水により、城内および城下の防火機能が向上し、水堀化により城の防備がより強固になりました。

上流部は江戸時代の状態が最も良好に残っており、丘陵斜面の岩盤層を掘った隧道(トンネル)があります。また、上辰巳町付近には、三段石垣に代表される延長260mの石垣群が築かれています。上・中流部を中心とした延長8.7kmが国史跡に指定されています。



『辰巳用水絵巻』(金沢市立玉川図書館蔵 部分・一部加筆)

日本三大用水の一つと言われる辰巳用水の導水技術として、隧道と並び高く評価されるのは、「伏越の理」という導水管を用いた逆サイフォンの原理です。兼六園側から木管(後に石管に改修)を埋設して標高の低い石川門前の土手内を通り、対岸の高台にある城内二の丸まで揚水する仕組みで、江戸時代初めの優れた土木技術水準を示すものです。

また、辰巳用水(東岩~兼六園)の平均勾配は10m進んでわずか4cmと緩やかで、高い測量技術と隧道の掘削技術を持っていたことがうかがえます。

辰巳用水で使用されていた石管は、兼六園(旧津田玄藩邸付近)や尾山神社横の通りなどでもみることができます。

逆サイフォンの原理

高低差を利用することで、高い水位の入り口からは水が吸い込まれるように入っていきます。低い水位の出口からは吹き上がるように水が出ていきます。



石川県埋蔵文化財センターには、辰巳用水で使われていた石管がおいでであるよ！どこにあるのか探してみてね。



ヒント：古代体験ひろばの園路を1周してみよう！

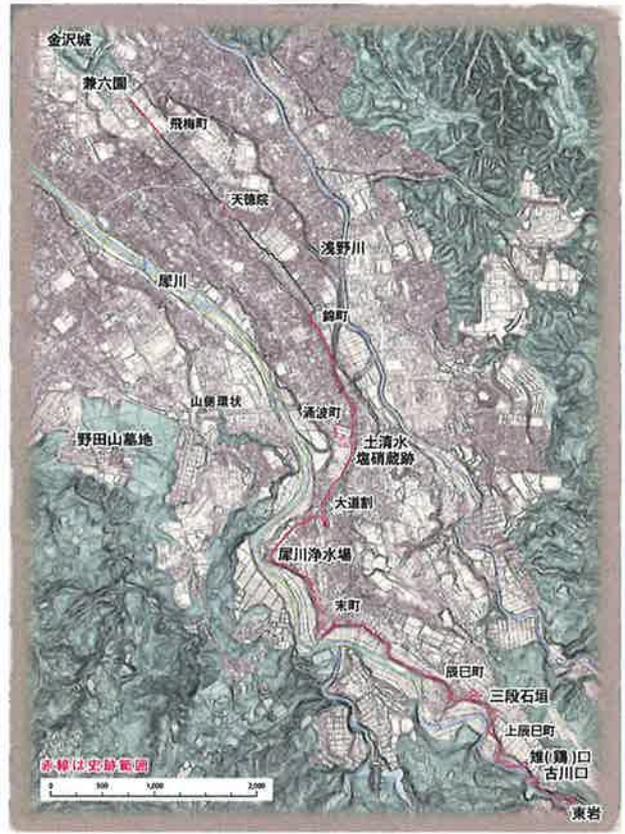
辰巳用水の位置は？



上空から見た辰巳用水(北西から)



土清水塩硝蔵跡横を流れる現在の辰巳用水



辰巳用水の流路

(大道割～錦町の約 2km 区間では、辰巳用水遊歩道が平成 5 年に整備されました。)

[左上・右] パンフレット『国史跡 辰巳用水 附 土清水塩硝蔵跡 (平成 26 年 3 月発行)』より

土清水塩硝蔵跡 (国史跡)

涌波町付近には、万治元(1658)年に加賀藩が設置した土清水塩硝蔵跡があります。これは辰巳用水を動力源として鉄砲に使う火薬の原料を粉碎・混合した黒色火薬製造施設です。江戸時代初めは金沢城内の施設で製造されていましたが、火災により度々爆発したため、危険回避のために慶安 4(1651)年に小立野付近に設置され、これも焼失したため、現在地に新築されました。平成 19～22 年度に行われた発掘調査により堀や火薬原料を製造・貯蔵した「搗蔵」や「硝石御土蔵」の跡などが見つかり、国史跡に追加されました。



『辰巳用水絵巻』(金沢市立玉川図書館蔵 部分・一部加筆)

土清水塩硝蔵跡は、2025 年度の一般公開を目指して、水車や貯蔵庫が復元整備されることとなりました！



探索マップ



国土地理院「地理院地図」をもとに作成
(<https://maps.gsi.go.jp/development/ichiran.html>)



この時期に描かれている街道や街路、用水、水路などは、現在の地図と一致している部分も多く、古地図と並べて町歩きができるスマートフォンのアプリも開発されているほどです。

当時の町名が現在も残っており、江戸時代初期に計画された都市の構造や文化的景観(地域に根ざした風景)が、現在の金沢城下の町並みの元となっていることがわかります。

約350年後の金沢に暮らす私たちの生活様式や文化にも受け継がれ、守られていることは、金沢城下の大きな特徴と言えます。

1

金沢城惣構跡 主計町緑水苑内遺構



『図説 金沢の歴史』金沢市より

場 金沢市主計町・尾張町

西外惣構の堀と土居が発掘調査の成果をもとに復元・整備されており、主計町の重要伝統的建造物保存地区の町並みと共に散策できるエリアとなっています。

2

金沢城惣構跡 まさがた 升形遺構



写真提供：金沢市

場 金沢市本町

西外惣構の堀と土居くつきよくを屈曲させて方形の閉鎖空間を造った升形門がありました。現在は発掘調査の成果をもとに高さ5mの土居と幅11mの堀を整備し、往時の景観を推定復元しています。

3

石川県立歴史博物館



『カナザワケンチクサンボ vol.1』より

場 金沢市出羽町
開 9時～17時
 (入館は16時半まで)
金 一般300円
 大学生240円

常設展示では、城下町金沢の暮らしと町並み模型がみられるほか、加賀藩の政治と文化をとりあげた展示を行っています。

7/22(木)～9/12(日)まで、夏季特別展「大加州刀展」が開催されています。

4

松風閣庭園しょうふうかく(旧本多家庭園)



写真提供：金沢市

場 金沢市本多町
開 9時～17時

加賀藩の重臣・本多家の屋敷の江戸時代初期に作られた池泉回遊式庭園。庭園は金沢市指定名勝、池泉にせり出す座敷と「本多家長屋門」が国登録有形文化財となっています。

詳しい利用案内等は各施設ホームページでご確認ください。

5

長町武家屋敷跡



場 金沢市長町

昔ながらの土塀や石畳の小路、用水が残り、公開されている「野村家」や「高田家」など豪壮な武家屋敷が立ち並ぶエリアです。冬には土塀を雪から守る「こも掛け」が行われ、兼六園の「雪吊り」と並ぶ金沢の冬の風物詩となっています。

6

前田土佐守家資料館



場 金沢市片町
開 9時半～17時
 (入館は16時半まで)
金 一般310円

前田土佐守家に代々伝えられてきた古文書、武具、書画等の歴史的資料を保管・展示しています。

江戸時代の加賀藩上級武士の歴史や文化について学ぶことができます。

7

足軽資料館



場 金沢市長町
開 9時半～17時

江戸時代の足軽屋敷2棟を移築再現した建物で、生垣や植木、石置屋根なども忠実に再現されています。当時の下級武士であった足軽とその家族の日常生活に関する生活用具やパネルを展示しています。

8

武家屋敷寺島蔵人邸



場 金沢市大手町
開 9時半～17時
 (入館は16時半まで)
金 一般310円

敷地内に残る家屋、土蔵、土塀および庭園が江戸時代の中級武家屋敷の様子を伝えるものとして金沢市指定文化財の史跡に、書画工芸などの寺島家所蔵資料は金沢市指定文化財の歴史資料となっています。

※記載のない写真は全て金沢市画像オープンデータより

詳しい利用案内等は各施設ホームページでご確認ください。

A

金沢城下町遺跡 (前田氏(長種系)屋敷跡地区)



場 金沢市大手町

金沢城の大手堀に面した広大な区画に加賀八家前田長種を祖とする前田氏(長種系)の上屋敷がありました。江戸時代初めは町屋として、寛永の大火以降、武家屋敷地として利用されました。発掘調査では、建物の礎石根石列や地下室、井戸などがみつき、中国陶磁器や織部焼の沓茶碗・向付などが出土しました。

B

金沢城下町遺跡 (丸の内7番地点)



場 金沢市丸の内

白鳥路横の現在裁判所の敷地は、加賀藩の公事場(今の裁判所に)や岡嶋備中守一吉ら上級武士の屋敷地となっていました。発掘調査では、江戸時代前半頃の躰の羽口や鉄滓、金属素材が出土し、鍛冶関連の職人がいた町屋が、寛永の大火後に武家屋敷地となり、池を持つ庭園や井戸、竹樋を用いた導水施設などがみつきました。

C

広坂1丁目遺跡



写真提供：金沢市

場 金沢市広坂

江戸時代初期の17世紀前半～江戸時代末まで武家地となっていた場所で、現在は金沢21世紀美術館があります。発掘調査では、道路と外惣構堀・土居の内側に複数の武家屋敷や区画整備された屋敷地の様子が確認されました。また、寛永の大火をはじめとする複数の火災の跡や火災後の片付け穴、礎石建物、井戸などもみつき、屋敷地の変遷をたどることができます。

D

金沢城下町遺跡 (本多氏屋敷跡地区)



場 金沢市出羽町

兼六園の南西側、小立野丘陵の北西端を占めた加賀藩筆頭家老本多家上屋敷にあたる場所で、現在は石川県立歴史博物館や加賀本多博物館、石川県立美術館、国立工芸館などがあります。発掘調査では、掘立柱建物や堀、柵、井戸、裏門などがみつきました。絵図などでは土蔵や馬場などが置かれていたことが確認できるため、それらに関わる施設の可能性があります。

F

金沢城下町遺跡 (本多町3丁目地点)



写真提供：金沢市

場 金沢市本多町

金沢市立中村記念美術館や鈴木大拙館などのある本多家上屋敷地の丘陵下側は本多家下屋敷地となっていました。発掘調査では、17世紀前半からの武家屋敷の建物や18世紀以降の本多家家中の御算用所に伴う遺構、下屋敷地内でも最も規模が大きい道路遺構、辰巳用水分流と考えられる石積みの水路跡などがみつけられました。

G

金沢城下町遺跡 (飛梅町3番地点)



写真提供：金沢市

場 金沢市飛梅町

加賀藩重臣前田氏(長種系)の下屋敷地の一角にあたり、現在は金沢市立紫錦台中学校や金沢くらしの博物館があります。発掘調査では、井戸や大小の土坑、溝など江戸時代の遺構がみつけられました。井戸からは家紋である梅鉢文入りの軒平瓦、土坑からは文化15(1818)年銘入り再興九谷焼の磨手碗も出土しました。

H

小立野ユミノマチ遺跡



場 金沢市小立野

小立野台地にある城下町はずれの遺跡で、文政5年(1822年)頃を描いた絵図では足軽の屋敷地や射場(練習場)があった場所です。現在は県立金沢商業高校があります。発掘調査では、区画溝や建物跡、大型の土坑、畠の畝溝などがみつけられました。また、「吉村平太夫」と墨書された火鉢が出土し、文献から19世紀代に生きた加賀藩足軽の名前だとわかりました。

I

醒ヶ井遺跡



写真提供：金沢市

場 金沢市醒ヶ井町

金沢駅の西側、近世後半に城下の拡張により造成された部分にあたり、現在は宅地などになっています。『延宝金沢図』では百姓地とありますが、『金沢町絵図』(文政6年)では町屋となっており、約50年の間に金石往還沿いが市街地化していったことがわかります。発掘調査では、大型の土坑のほか、溜升や竹樋を利用した水道施設が多く出土し、水道技術が向上したことがわかります。

用語解説

惣構（そうがまえ）

江戸時代初め頃に各地の城下で造られた、城を中心とした城下町を防御するために囲い込んだ堀（ほり）や、堀の城側に土を盛り上げて造った土居（どい）などのこと。

金沢城下では、2代利長により慶長4年（1599年）に造られた「内惣構」と3代利常により慶長15年（1610年）に造られた「外惣構」が二重に巡っています。金沢城から見て東西に分かれているため、それぞれ「東内惣構」・「西内惣構」・「東外惣構」・「西外惣構」と呼ばれ、その延長は約9キロメートルを測ります。平成20年に金沢市指定史跡となりました。造成時の堀は最大約5m、土居は堀底から最大約9mの高さを測り、上に竹や松、ケヤキなどが植えられていました。明治時代以降、防御の機能が失われたため、大部分の土居は堀を埋めるために消失してしまいましたが、堀部分は幅を狭めて用水として現在も使われています。発掘調査成果をもとに1部が復元整備され、400年以上前に造られた当時の景観を見ることができます。

惣構のイメージ図

（パンフレット『金沢市指定史跡』金沢市より）



加賀八家（かがはっか）

加賀藩の年寄役を代々世襲していた藩創成期に貢献のあった8つの家柄で、5代綱紀の時代に位置づけられました。いずれも1万石以上を持ち、「加賀には殿様が9人いる」とまでいわれた重臣で、八家は月交代で前田家に赴いて藩の執政を担当し、重要な決定の際には合議制をしいていました。本多家（50,000石）、長家（33,000石）、横山家（33,000石）、前田家（長種系 18,000石）、奥村家（宗家 17,000石）、村井家（16,569石）、奥村家（支家 12,000石）、前田土佐守家（11,000石）がありました。（藩末時の禄高順）金沢市は、加賀八家の屋敷地のあった場所に説明看板を設置しています。

足軽（あしがる）

足軽は「身軽に行動する歩兵の1種」として、戦国～江戸時代に活躍した下級武士です。江戸時代の足軽は、戦のための武術訓練や武具の手入れの他、門番やお供など、さまざまな仕事をこなしました。他の藩では足軽長屋という共同住宅に住みますが、加賀藩では庭付きの一戸建てに住むこともありました。一組単位で区画された「組屋敷」の中を分割し、一軒ずつ生垣で囲んだ、板葺で石置き屋根のシンプルな間取りの家でした。

御算用所（場）（ごさんようしょ）

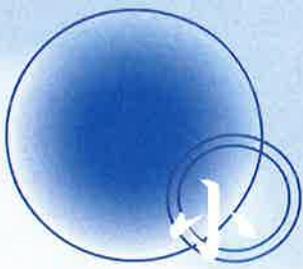
金沢城の北西、加賀藩における財務を司る機関で、新堂形、金谷門外を経て明治2年まで金沢城北西の黒門前緑地周辺にありました。算用場奉行以下算用者と呼ばれる実務を担当する役人が150名勤務しており、算用者は筆算の才能が必要とされ、書籍や映画で知られる「武士の家計簿」の舞台にもなりました。他に郡奉行、改作奉行、御預地方御用、定見地奉行など、御算用場奉行管下諸種の役所が併設され、土蔵3棟も置かれていました。

鞆の羽口（ふいごのはぐち）

金属製錬などに使うピストンの原理で炉に風を送る装置で、羽口は炉に接続する先端部分になります。

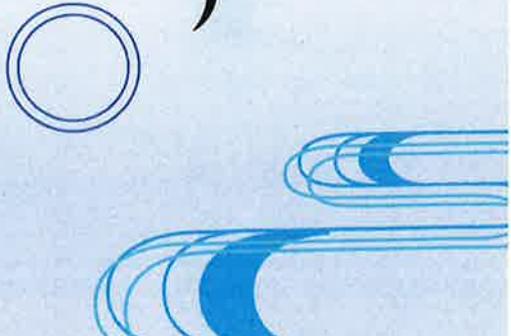
鉄滓（てつさい）

製鉄で鉄を精錬した時に出る不純物が混じった不純物（クズ）で、椀形滓は炉の底にたまった時にできる浅い椀状の形になったものをいいます。



小松城下の

にぎわいとものづくり



寛永十六（一六三九）年、加賀藩三代藩主前田利常が隠居の地を小松城に定めて以降、小松城下は大きく発展していきました。

利常が礎を築いた城下の街並みやにぎわいの痕跡、現在も息づく小松のものづくり文化の源流を探ってみたいと思います。

小松城下の成り立ち

小松城は、めまぐるしく城主が入れ替わる戦国期を経て、慶長5（1600）年から加賀藩主前田家の管轄となりました。その後、元和元（1615）年の一国一城令で、一旦は廃城になりますが、寛永16（1639）年に三代藩主前田利常の隠居城として例外的に幕府から認められ、再築されました。「平城」の小松城は、周囲に流れる梯川や九竜橋川を利用した広大な水濠のなかに8つの島が浮かぶ景観から“浮城”と呼ばれ、城域の大きさは金沢城の2倍近くあったとされています。

寛永17（1640）年に、利常が江戸藩邸から入城した後は、利常付きの家臣団とその家族の移住、金沢から呼び寄せた町人達、増加する人々の需要に応じた商人や職人が集まり、利常隠居領の城下町として、小松は大いに栄えていきました。

また、利常は絹織物、畳表、製茶などの産業を保護奨励しており、特に、小松を代表する名産品の「小松絹」をとり扱う多くの絹問屋が営まれ、利常が小松に隠居していた慶安・承応年間（1648～1655）に生産量の最盛期を迎えます。

万治元（1658）年に利常が亡くなると、「城代」と「城番」による小松城の統治・管理が始まります。各種問屋が置かれ、物資流通の拠点となっていた小松は、産業・商業の町として発展しました。小松市街地には、「細工町」や「新鍛冶町」など、城中御用の職人たちが暮らした場所の名称が、現在も町名として遺されています。



小松城の北側から見た小松市街地

寺社の造営

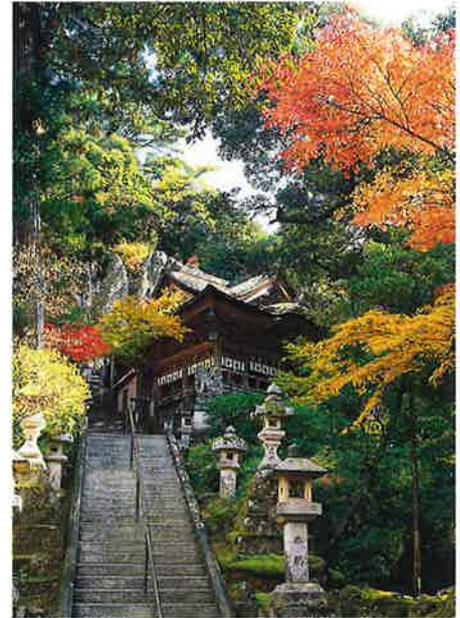
利常は、寛永 17(1640)年から那谷寺の再興・造営を始め、明暦 3(1657)年には、小松城の鬼門の方角(北東方向)にあたる梯川のほとりに小松天満宮を創建します。

その後も、複数の神社に社領を寄進したり、郊外に点在する寺院を城下へ移転させることで、城下の整備と寺社の保護を行っています。この頃に移転した寺院群は、現在も市街地に多く残されています。



那谷寺

(写真提供:石川県観光連盟)



文化の振興

文化を積極的に保護・奨励した利常は、茶人・千利休の血筋を引く仙叟宗室(裏千家始祖)を召し抱えます。仙叟が武士だけでなく商人・町人に至るまで茶の湯を広めたことで、小松城下に茶道文化が浸透しました。また、小松天満宮の初代別当として招いた能順は、連歌の第一人者として連歌に秀でた文化人を育成するなど、小松の文化発展に大きく貢献しました。

小松城の取り壊し

小松城は、廃城令が布告される明治 6(1873)年より前に廃城準備が行われていました。城の取り壊しに関わったのは、明治 5 年に小松市金平から小松城三の丸に設置された小松懲役場の服役者たちでした。労役作業の一環として、土地改良や開墾に携わりました。



探索マップ

…北国街道



1

小松城 てんしゅだい 天守台



場 小松市丸の内町
(小松高校グラウンド横)

明治期の取り壊しや市街地開発などによって、現在、小松城の遺構はほとんど残されていません。天守台と内堀の石垣のみが、当時の場所で現存しています。
小松城本丸やぐらだいしがき櫓台石垣は市指定史跡。

2

来生寺 らいしょうじ の寺門 じもん



場 小松市園町

来生寺には、かつて小松城の二の丸にあったうなぎばしごもん鰻橋御門が移築され、現在も見るることができます。往年の小松城の面影を残す数少ない貴重な建造物です。
市指定文化財。

3

小松市立錦窯展示館 にしきがま

場 小松市大文字町
午前9時～午後5時
開 (入館は4時半まで)
金 一般300円

昭和初期の町家を改築した九谷焼の展示施設です。うわえつけ上絵付の窯である「錦窯」や歴代徳田八十吉の作品が展示されています。
国登録有形文化財。

4

小松市立登窯展示館 れんぼうしき

場 小松市八幡
午前11時～午後3時
開 (入館は2時半まで)
金 無料

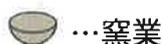
昭和40年頃まで使用されていた連房式のぼりがま登窯を見学できます。また、学習展示棟では、置物の製造工程や地元作家の作品が展示されています。市指定文化財。

現在も残っている小松城の資料

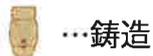
- 芦城公園** 小松城本丸櫓台石垣、本丸堀石垣
- 来生寺** 小松城二の丸(旧三の丸)の鰻橋御門
- 成巽閣** 中土居の兔御門扉、小松城葭嶋御殿兔門扉
- 小松市立博物館** 小松城二階御亭入口扉一式

詳しい利用案内等は各施設ホームページでご確認ください。

用語解説



…窯業



…鋳造



…城



…街道



九谷焼

加賀地方一帯で生産される、九谷五彩と呼ばれる上絵付けが特徴の色絵陶磁器。製作時期や作風によって古九谷や再興九谷などと呼び分けられます。

連房式登窯（れんぼうしきのぼりがま）

16世紀末の文禄（ぶんろく）・慶長（けいちょう）の役に際して、朝鮮半島から日本に連れて来られた陶工たちが持ち込んだ築窯技術で作られた、焼成室（房）を斜面に複数連ねた窯の総称。

錦窯（にしきがま / きんがま）

陶磁器の上絵焼き付けに用いる小型の窯で、炎が器と直接触れないように内窯と外窯の二重構造になっている。上絵窯。

釉薬（ゆうやく）

陶磁器の表面に施されたガラス質の部分。窯で焼成すると薄い層が形成され、吸水を防ぎ、ガラス質特有の光沢を帯びる。うわぐすり。

色絵（いろえ）

透明な釉薬をかけて焼成した陶磁器の表面に、絵の具で彩色した後、上絵窯を用いて低い温度（約800度）で焼き付ける手法。

陶石（とうせき）

陶磁器の原料として利用される鉱石。これを細かく砕いて粘土をつくり、陶房（陶磁器をつくる作業場）で器などに仕上げられます。

漆継ぎ（うるしつぎ）

漆を使って割れた器を修復する伝統的な技法。修復部分を「金粉」で装飾したものは「金継ぎ（きんつぎ）」と呼ばれています。



溶解炉（ようかいろう）

金属を加熱して溶かす炉。溶かされた金属は取瓶（とりべ）に移され、鋳型に注がれる。

城代（じょうだい）と城番（じょうばん）

「城代」：留守中の城主にかわって城を管理し、政務を代行するもの

「城番」：城代を補佐した役職

北国街道（ほっこくかいどう）

琵琶湖の北東岸（滋賀県彦根市）を北上し、福井、金沢、富山、直江津（新潟県上越市）を通過して新潟まで達する、近畿地方と日本海側の北陸地方を結ぶ近世の主要街道。

大聖寺城下

「家老屋敷と村」

大聖寺城下での数少ない発掘事例である八間道遺跡の調査成果からは、城下の一等地にある家老屋敷で使われた高級食器類の様子がわかりました。そこかそこから約3km離れた大菅波コシヨウズワリ遺跡は、江戸時代の大菅波村の一部で、同じ頃に使われた食器類が出土しました。その違いを見てみましょう。

大聖寺城下の成り立ち

大聖寺城下町がつくられたのはいつの頃でしょうか。天正 11 (1583) 年、溝口秀勝が大聖寺城に入城し、その後 15 年間この地を治めたことから、この頃に城下町の原形がつくられたといわれています。

江戸時代は前田家の支配するところとなり、寛永 16 (1639) 年、利常の三男利治が 7 万石をえて大聖寺藩の初代藩主となりました。この時、すでに大聖寺城は破却されており、城跡の麓に藩邸を構えたことから、大聖寺は城をもたない城下町となりました。文政 4 (1821) 年には 10 万石の高直しが許されました。

城下における有事のさいは、北の大聖寺川と南東の熊坂川、西は錦城山が防衛ラインとなり、さらに藩邸の近くには重臣の屋敷を配置しています。城下の中心には町人町があり、当初は鉄砲町あたりが町端だったとみられ、城下町の発展とともに拡張されていきました。武士は町人町をとり囲むように居住しています。

記録によれば大聖寺川の氾濫は江戸時代だけでも数百回といわれ、城下の中心ほど被害が大きかったようです。反面、大聖寺川を少し下れば塩屋の港に近く城下の水運業は活気があったようです。陸路では、越前方向から北国街道が関町の関所をとり、敷地から小松方向へ通じ多くの人や物が移動したことでしょう。



城下の遺跡

八間道遺跡

平成5年度に加賀市教育委員会により発掘調査が行われました。調査地は錦城山の東山裾の藩邸正面に位置します。遺物は食器類では中国の青花、多量の国産陶磁器が出土し、金属製品では、金製の煙管、金鍍金が施された匙・襖引手、刀装具では小柄等がみられました。絵図をみると「佐分家」という家老屋敷が置かれて場所でした。重臣の屋敷にふさわしい高級品の出土が目立ちます。



1 肥前染付皿、2 肥前染付平鉢、3 肥前染付皿、4 九谷古窯染付角鉢、5 九谷古窯染付皿、6・7 肥前陶器碗、8 瀬戸美濃陶器碗、9 肥前陶器皿、10～12 中国青花皿、13～15 土師器皿、16 純金製煙管（雁首）、17 襖引戸、18～20 小柄

加賀市教育委員会所蔵



18



19



20



17

村の遺跡

大菅波コショウズワリ遺跡

大聖寺町から北東へ3kmほどの位置にあります。江戸時代の遺構は、調査地北側の高いところに簡易な建物と井戸が確認され、南側の低いところは、現代と同じく水田だったと想定されます。遺物は陶磁器が出土しましたが、出土量が少ないです。確認した遺構は江戸時代の大菅波村の一部と考えられます。



1～4 肥前陶器碗、5 肥前陶器皿、6 肥前染付碗、7 肥前染付皿、8 初期伊万里染付皿



探索マップ

北陸道



国土地理院「地理院地図」をもとに作成
(<https://maps.gsi.go.jp/development/ichiran.html>)

1

大聖寺城跡(登城口)



場 加賀市大聖寺八間道
(加賀市立錦城小学校裏)

江戸時代は、一般人の立ち入りは禁止でしたが、現在は錦城山公園になっているので、誰でもはいることができます。写真の登城口には駐車場があります。市指定文化財。

2

藩邸跡付近から見た白山



場 加賀市大聖寺八間道
(石川県立加賀聖城高校裏)

藩邸跡付近から東方向をみると、少し雪が残った白山がきれいに(電柱が邪魔ですが)見えました。

藩主さんや城下の人々も同じ白山を眺めていたのだろうと感じました。

3

江沼神社長流亭



場 加賀市大聖寺八間道

宝永6(1709)年に建てられた数寄屋造建築で、藩主の休憩所として使われました。

建物内部の見学もできますが、事前の予約が必要です。

国指定有形文化財。

4

大聖寺藩邸河道跡 及び北面石垣



場 加賀市大聖寺八間道

藩邸の北にある旧大聖寺川に面する河道に接して11段の階段が設けられています。江戸中期につくられた北面の石垣は大部分が残っており、当時の土木技術の高さがうかがわれます。

市指定文化財。

詳しい利用案内等は各施設にお問い合わせください。

5

じしょうどう
時鐘堂



場 加賀市大聖寺本町

二代藩主利明によって寛文7（1667）年に建てられました。鐘かねについて人々に時刻を知らせるものです。

現在の建物は平成14（2002）年に再建されたものです。

6

大聖寺関所跡



場 加賀市大聖寺関町

加賀藩前田家の領国支配上重要な関門りょうごくしはいじょうとして、越中境関とともに設置され、加賀藩の二大関門として重要な役割がありました。山中・山代への湯治客もここを通過しました。

市指定史跡。

7

そうじゅじ
旧大聖寺関所門(宋壽寺)



場 加賀市大聖寺神明町

大聖寺藩の関所（⑥）にあった門で、明治時代の関所廃止にともなって移築されたものです。

関所の門が現存している例は、全国的にみてもここだけのようです。

市指定文化財。

8

びょうしよ
大聖寺藩前田家一族廟所
(実性院)



加賀市教育委員会提供

場 加賀市大聖寺下屋敷町

大聖寺藩主前田家とその分家にあたる家老家の廟所です。藩祖から最後の14代までの歴代藩主墓が一箇所に集まっているのは全国でも珍しいようです。

市指定史跡。

詳しい利用案内等は各施設にお問い合わせください。

ひとつと用語解説

【あ行】

越前焼（えちぜんやき）・・・福井県でつくられた焼物。主に甕・壺・播鉢を生産。

【か行】

煙管（きせる）・・・煙草（たばこ）を吸う道具。

小柄（こづか）・・・刀の鞘（さや）に装着する柄の着いた小刀。

【さ行】

磁器（じき）・・・陶石。または陶石と粘土でつくる焼物。釉薬がかかる。

初期伊万里（しょきいまり）・・・1610年代～1640年代に佐賀県有田で焼かれた焼物。

数寄屋造（すきやづくり）・・・茶室を取り入れた建築様式。

青花（せいしか）・・・中国でつくられた染付。

瀬戸・美濃（せと・みの）・・・愛知県・岐阜県など広い範囲にある窯でやかれた焼物の総称。

染付（そめつけ）・・・素地に藍色（あいいろ）で文様を描いた焼物。

【た行】

高直し（たかなおし）・・・大名の領地の石高を変更すること。

陶器（とうき）・・・精製した粘土でつくる焼物。釉薬（ゆうやく）がかかる。

【は行】

肥前（ひぜん）・・・佐賀県・長崎県など広い範囲にある窯でやかれた焼物の総称。